

Title	読書する女：アリス・ジェイムズの日記における「読む」ことの意義
Sub Title	A Reading woman in Alice James' diary: a quest for regaining herself
Author	富田, 佳子(Tomita, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.93, (2007. 12) ,p.190(33)- 204(19)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00930001-0204

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

読書する女*

—アリス・ジェイムズの日記における「読む」ことの意義—

富田 佳子

序論

1848年、アリス・ジェイムズは誕生した。長い間、著名な哲学者・心理学者として活躍したウィリアム・ジェイムズとその弟であり小説家となったヘンリー・ジェイムズの妹として人々の記憶の片隅に残ることになる。生涯、病弱で、社会的な活動をほとんどしなかったアリスは、しかし、その死を迎える数年前から日記を書き始めている¹。その日記は死後も出版されることなく保管されていたが²、フェミニズム運動が盛んになり女性の書き残したものに光が当てられ始められた時、アリスの日記も息を吹き返すことになる。1980年にはジーン・ストラウスがアリスの伝記を書き、アリスの人生はジェイムズ家の付属的存在としてではなく、一人の女性が生きた足跡として描出され、その意義も問われることとなった。クリスティン・ブルドーは、アリスにとって日記を記し始めることは、孤独感を和らげるだけでなく、それは「他者」の手にあるうちは不安定である自分の主体性を奪回する試みであり、「自我」を維持する為に奮闘することをも意味したのだと論じている(56)。また、エデルはアリスにとっての日記とは、プルースト流に言えば「彼女なりの時の超克の仕方」であり、死後もその声を残す試みであったのだと述べている(20)。ストラウスもまた、「アリスを不幸なヒロインとして考えてしまうことは誤りであって、アリスの体験は独自の価値を持つものであり、彼女はアリス・ジェイ

ムズであるということの意味を自ら定義しようと闘ったのだ」と積極的に評価している (xv)。「他者」の手から「自我」を奪回する為に、またそれを「自ら定義」するために、日記という手段によってアリスは、自分の人生を自分の目で「読み」直したのだとも考えられる。本論では、このアリス・ジェームズの『日記』における「読む」行為の意義について考察していく。「読む」ことを通して、アリスはどのような主体性を獲得したのか？ 自分自身の半生をどう「読んだ」のか？

1. 日記を綴ること、「読む」こと

アリスの祖父はアイルランドからの移民であり、移住後大成功を収めて富裕な家柄を用意する。5人兄弟の中で唯一女性として生まれたアリスの幼少時代は、豊かな有閑階級となっていた父ヘンリー・ジェームズ・シニアにより、兄達と同様に国際的視野を養い、芸術や文化に触れる教育を受けることになる。さらに豊富な読書をも兄達と共にしていたアリスの知性は、彼等と劣らぬものを持っていたと言われている。しかしその一方で、父ヘンリーの独自の教育方針は、幼少期からヨーロッパ各地を転々とするという不安定な居住環境を体験させ、ジェームズ家の5人の子供達の心身にそれぞれ何らかの影を落とすことにもなる。末娘のアリスも、原因のはっきりしない心身の病に若い頃から苦しめられ、大変限られた小さな空間の中でその短い生涯を終えている。15歳の頃から発病したそのようなアリスの叫びと震え“shrieking or wiggling through the most impossible sensation of upheaval” (Edel 5) は、この後にも度々再発して家族を悩ませることになる。

そのような決して幸福とは言えなかったアリスの生活を支えたものは、彼女が行った膨大な読書であり、さらに言えば、それが彼女の生活そのものだったのだ。小さな私的空間の中で生活しながらも「読む」ことで、アリスの日常の興味は、小説、演劇、そして政治問題にまで及んでいる。ジェームズ家の中で、彼女が唯一政治に興味を持っていた人物であったという観点からも、他の兄弟達に劣らぬ広く豊かな世界観を持っていたと考

えられる。

アリスは、43歳でこの世を去るまでの最後の3年間に日記を綴っている。その存在を理解のあったごく親しい兄ヘンリーにも隠していた。「読む」アリスは、自ら日記を綴ることで、肉親とはいえ「他者」である父親のヘンリー・ジェイムズ・シニアや兄のウィリアム、ヘンリー等によって「読まれる」アリスではなく、自らが自分の世界を「読む」ことを試みたのではないか。

アリスの日記はもともと“commonplace book”として使っていたノートの途中から始まり、次のノートに引き継がれていったものである (Edel xxxiii)。“commonplace book”とは備忘録、雑記帳などと訳されるが、15世紀イギリスに誕生した読書日記の一形態である。アメリカでも植民地時代から多くの人々がこの習慣を身につけ、自身の文章や思考の習作のために使っていた。アリスの日記は文字通り、彼女がつけていた備忘録“commonplace book”の延長線上に位置づけられるものである。

その日記は、アリス自身による日記の定義から始まる。

I think that if I get into the habit of writing a bit about what happens, or rather doesn't happen, I may lose a little of the sense of loneliness and desolation which abides with me. My circumstances allowing of nothing but the ejaculation of one-syllabled reflections, a written monologue by that most interesting being, *myself*, may have its yet to be discovered consolations. I shall at least have it all my own way and it may bring relief as an outlet to that geyser of emotions, sensations, speculations and reflections which ferments perpetually within my poor old carcass for its sins; so here goes, my first Journal! (25)

この日記を書き始めた頃のアリスは、ほぼ病床について毎日を過ごしていた。アリスにとって日記は孤独感を癒すだけでなく、「感情や感覚そして思索や内省の噴出口」になるだろうと書かれている。女性でありながら兄たちに比する知性を持ち合わせたアリスの生涯は、社会規範にとらわれな

い自由教育と 19 世紀的な女性観との板ばさみとなってアリスを苦しめるものになったと考えられる。アリスにとっての「噴出口」は、密かに綴られる日記というささやかな形となって現れ出ることとなったのだ。

アリスの残した日記は 19 世紀後半の女性達が抱えていた状況の謎を解く鍵でもあり、アリスの経験、感覚、そして身体的状態は、文学的な知性へと集約されることにより、現在の私達へと伝えられることとなった。さらに、彼女の小説家としての技術や文学的技巧が施されないその自然な記述は、より純粹にアリスの生きた人生とその世界観を描出しているように思われる。

15 歳以来病むこととなる病は、アリスの身体を“my poor old carcass”私の哀れむべき老体（死体の意味もある）へと変えてしまう。それは、やがてフロイトが女性のヒステリー治療を行うようになっていく症状の特徴的な傾向を示していた。ストラウスは、アリスの苦しんだ症状の発祥を当時の集団的現象のひとつ「不可解な神経の病」“mysterious nervous ailments”（Strouse xv）であったこととして指摘している。アリスが生きた頃、女性達の社会的地位や機能が著しく変化する時代がすでに訪れていた。マーガレット・フラーは、著書 *Woman in the Nineteenth Century* (1845) において徹底した男女平等の考えを打ち出し、1848 年にはフェミニズム第一波の始まりとされるセネカフォールズ会議がニューヨーク州セネカフォールズにおいて開かれている。奴隷解放運動などとも重なり、人種やジェンダーを超えた平等・同権が叫ばれて世論が大きく動き、また割れた時代に突入していた。

しかし、そのような社会的動向の中であってアリスは、女性として「感情や感覚そして思索や内省の噴出口」を持つことの難しさをも肌で知っていたと考えられる。そのような時代の変化に理解を示さなかった父や兄ウィリアムは、家庭的な女性を妻に選び、19 世紀ヴィクトリア朝に典型的な夫婦関係を築いていく。ヘンリーは小説家として女性の生き方に対する観察も深く、主人公としても多く登場させて鋭い洞察力を窺わせるが、彼の女性に対する解釈は 19 世紀的な女性像の枠組みを自由に超えるもの

であったとは言い難い。

アリスの日記には、日常のこまごまとした出来事、たとえば、看護婦から聞き知る近隣の人々の生活、自分の読んだ小説や作家のこと、イギリスの政治や国際問題まで幅広い領域について言及されている。外出もほとんどせず室内か病床にあったアリスの生活に実際に起きる出来事といえば、看護婦や医師、そして親密で晩年共に生きたキャサリン・ピーボディ・ローリングとの会話やその看護についてであり、また、毎回楽しみにしていた兄ヘンリーの訪問であった。キャサリン・ピーボディ・ローリングとは、アリスが 25 才の時に出会い、それ以来“Boston marriage”³を髣髴とさせるような親密な仲にあった。そのような日常でアリスが行った最も積極的な活動、唯一自由に行うことのできた主体的な活動、それが「読む」という行為だったのである。彼女の「読む」こと、その豊かな読書体験が実に様々な書物に及んでいたことをストラウスはつきとめている。時事問題や歴史小説、回想録や伝記、書簡など何でも読み、外国文学にも親しんだ (Strouse 174)。そして、より道徳的に自由で大きな世界があることを読書によって知ることができたのだとストラウスは論じている⁴。

また、旧約聖書や『リア王』、トーマス・ハーディやジョージ・エリオットなどを読むことで、アリスに「様々な種類の忍従 (諦め) resignation の規範」を与え、自らの置かれた運命と向き合い、耐え忍ぶことをも教えたのだと論じている (Strouse 266)。より深く、より自由に世界を知り、そしてよりよく忍従できるための道しるべを、読書を通してアリスは培ったのである。アリスは、自分の病状について語る時、常に冷静で客観的である。彼女はジョージ・エリオット書簡集を次のように読んでいる。

What a lifeless, diseased, self-conscious being she must have been! Not one burst of joy, not one ray of humour, not one living breath in one of her letters of journals, the commonplace and platitude of these last, giving her impressions of the Continent, pictures and people, is simply incredible! Whether it is that her dank, moaning features haunt and pursue one thro' the book, or not, but she

makes upon me the impression, morally and physically, of mildew, or some morbid growth—a fungus of a pendulous shape, or as of something damp to the touch. I never had a stronger impression. . . . What an abject coward she seems to have been about physical pain, as if it weren't degrading eno[ugh] to have head-aches, without jotting them down in a row to stare at one for all time, thereby defeating the beneficent law which provides that physical pain is forgotten. (41)

このようなジョージ・エリオットに対するアリスの批判は、病に対しユーモアを、そして生活の中に喜びを見出そうと苦しんだアリスの心の叫びともとることが出来る。アリスは最後まで、自らの病に対して自己憐憫の情に流されることなく、ありのままの自分の生を冷静に受けとめ、時にはユーモアさえ盛り込んで、日々の生活に対峙していくのである。

アリスにとって「読む」ということは、どのような行為だったのか。ヴァージニア・ウルフは、「読む」という行為には区別すべき *learning* と *reading* とがあると定義している。*learning* は読書を通して真実を得る為に検索をする孤独な探究であり、*reading* は純粋な人間的情熱を原動力にした無欲の行為であるとしている (Woolf 196)。

しかし、アリスの読書量とその「読む」行為は、ウルフが指摘する簡単な区分けを許さない。*learning* と *reading* それらが共にアリスの生活を支えていたことは、日記の中にも表れているのである。アリスにとって書物は、世界を知るための最も身近で実現可能な情報源であった。アリスの生きる空間も時代も飛び越え、多くの人々の生き様を知る貴重な *learning* であり、社会とコンタクトを保つ為の手段でもあったのである。しかし、またその一方で、それは、純粋に *reading* 「読むこと」を楽しむ人間的な情熱の対象でもあったと考えられるのである。

2. 外の世界を「読む」アリス

日記の中では看護婦から聞き知る日常の他愛のない出来事を語ることと

ほぼ同等なこととして、learning によって得た時事問題が織り込まれ、歴史書を読む傍ら、時事的な政府のあり方を痛烈に批判したり揶揄したりと批評家のような語りがなされる。それと同時に、批評も感想もほとんど記されないまま楽しむために行われた膨大な読書体験 reading の存在を、その題名や読んだ事実が日記のあちらこちらに渾然と挿入されていることから窺い知ることができる。それらの出来事や知識には優先順位というものがつけられることなく、アリスの生きる世界は私的空間も公的空間も縦横に広がって創出されている。アリスは「読む」ことで、生活そのものを紡ぎだしていたのだ。その語り口は時に辛辣で、鋭く、社会の孕む矛盾や偽善を躊躇いなく指摘し (88)、アメリカ生まれのアリスならではの国際的視点から国際的相互理解の難しさを語っている (97)。また、他の箇所では、イギリスの政治家達を愚鈍でインスピレーションもユーモアも欠如していると糾弾し、ジェームズ家のルーツであるアイルランドの問題についても触れている (100)。ヘンリーは、そのようなアリスにアイルランド気質を読み取り、彼女がアイルランドに住んでいたなら、もっと異なる人生を送ったのではないだろうかとも言っている。アイルランドという守るべき母国があれば、アリスは確かに自らの存在意義を感じる人生を送ることができていたかもしれない。また、隣人の信仰に対する容赦のない批判なども見られる。アリスが慣習や宗教に捕らわれない自由な発想、自ら判断する能力に長けていたことが窺われる (45)。

アリスはまたハーヴァード大学で教える新進の心理学者であるウィリアムの論文に対しても、自らの鋭い批評眼をもって「読む」。ヒステリーの催眠療法についての彼の論文“The Hidden Self”を自らの症状と照らし合わせて読み、自身の病状を客観的に (あるいは客観を装って) 触れる絶好の機会を得ている。ウィリアムの論考は、催眠療法によって、日常で社会的に振舞われているその人の人格とは別の人格が現れ、語る症例が幾つかあげられている。これは、当時注目され始めていた催眠療法による症例として他の医師たちが多くその記録を残しているものと一致する。しかし、それは、アリスが苦しんだ病を解決する方法とは程遠く、そのような論文を

書いた兄ウィリアムに対するアリスの不信感はより深くなっていったと言えるだろう。兄ウィリアムがアリスの病に読んだ症状は、アリス自身の読み方と齟齬をきたすものであったのだ。

William uses an excellent expression when he says in his paper on the “Hidden Self” that the nervous victim “abandons” certain portions of his consciousness. It may be the word commonly used by his kind. It is just the right one at any rate, altho’ I have never unfortunately been able to abandon my consciousness and get five minutes’ rest. I have passed thro’ an infinite succession of conscious abandonments and in looking back know I see how it began in my childhood, altho’ I wasn’t conscious of the necessity until ’67 or ’68 when I broke down first, acutely, and had violent turns of hysteria. (149)

そして、その 10 日後の日記には、さらに皮肉を込めて、兄の論文に対する反感を書き記している。

I must “abandon” the rhetorical part of me and forgo the eloquent peroration with which I meant to embellish the above, on the ignorant asininity of the medical profession in its treatment of nervous disorders. The seething part of me has also given out and had to be abandoned. (150)

これは、兄ウィリアムに対してだけでなく他の多くの医者達、自分の病へ十分な理解と解決方法を示すことのなかった人たちへの揶揄でもあったとも考えられるだろう。またそれと同時に終始無力であった医学そのものへの痛烈な嫌悪であったとも読むことができる。そして、自分の病を最もよく知り理解するのは自分自身でしかないことをアリスは明確に意識していくことになる。

自分と狂人の唯一の違いは、自分自身が自分という患者に対する医者と看護婦と拘束衣の義務を担っていることだとアリスは述べている。いかに

もあわれな「患者」として自分を語りたくはないというアリスの強烈な思いと、自分が自分に課す拘束衣を一瞬でも取払い自身を語りたいという思いのために、兄の論文を批判的に「読む」という行為がアリスにとって重要だったのではないだろうか。

富島美子は、アリスの兄の論文“The Hidden Self”（隠蔽された自己）に対する批判のなかで、アリスが父親の亡くなった家の中で一人きりとなり孤独感に苛まれたことを追憶した箇所と言及し、家や家具が声を持つ瞬間を指摘している。誰もいない広い屋敷の中で“Alone! Alone!”という声が虚しく響く。「『ひとりぼっち、ひとりぼっち』そう屋内にこだまする声が、まさか本当に家が叫んでいた声だったはずもない。そうではなく、不気味にも声を発する家とは、その同じ声をあげたかったアリス自身の置換された姿であっただろうことは想像にかたくない。空虚なわたしとからっぽの家が共振する」（富島 23）。女性を閉じ込める部屋やその色が、何らかの意味を持ち、声を発するのである。富島はそれを「室内装飾（インテリア）と精神的内面（インテリアリティ）の鏡映」であるとし、シャーロット・パーキンズ・ギルマンが安静療法の為に閉じ込められた部屋の中で、自らの病状を語る代わりに家について語る姿と、アリスが自らの病状を語れない状況を重ねて考察している。

「病状について考えること」が許されないがゆえに、病状のかわりに、語り手は家についての印象主義的できわめて断片的な描写でテキストを埋めてゆくのだ——人里はなれた邸宅、鍵のかかる門、庭師や使用人たちの住む独立した小さな家々、鬱蒼と木々の生える囲いこまれた甘美な庭、廃屋と化した温室、そして語り手だけが感じる、家の中に漂う奇妙な気配——「一時的な鬱状態、軽いヒステリーの気味という以外は何も問題はない」語り手と家。（富島 27）

このように富島が指摘するようにアリスは、自らの病状を語れない代わりに、身の周りの出来事を語り、読んだ物語を語り、そして社会をその政治

のあり方を語ったとも言えるのだ。故に、その痛烈な語り口は、アリス自身が抱えていた苦痛と共振し、叫びに近い声を発しているのだと考えられるだろう。

アリスの「読む」者としての目は、自身の病む体のみならず、病んだ（イギリス）社会にも向けられる。その語り口は辛らつで、鋭く、社会の孕む矛盾や偽善を躊躇なく指摘している。時に資本主義批判をし、また、植民地主義に対しても皮肉を込めて言及する（88）。自由という名のもとに、現実に行われている政治的不条理は、アリスの透徹した批判眼によってその本質が暴かれている。社会的な欺瞞や表面上の大義名分の下にある現状を見極める、その能力は、アリス自身の病に対峙してゆくその姿勢と共振するものでもあったのである。

アリスは、イギリスの政治家達を愚鈍であると批判し、彼等のインスピレーションの欠如とユーモアのなさを糾弾し、ジェームズ家のルーツであるアイルランドとの問題についても言及している（100）。

The behaviour of the Unionist and Tory is simply the *bête* carried to its supreme expression. It is truly a great misfortune for a people to be so destitute of inspiration, and so completely without humour, as to be left absolutely naked to itself. If you could read, too, the chorus going up to heaven on all sides over the love of Manliness and *fair play* in the Briton's bosom! Those qualities of which they are always assuring the rest of the world they hold the monopoly. The Englishman, however, should not be held accountable for being mentally so abject before the Irishman — he is helpless for there is absolutely nothing in his organization wherewith he can conceive of him, and his self-respect naturally has no other refuge save in loathing and despising him. He has no wings to his mind to bear him whither his leaden feet are inapt for carrying him, so that it is only now at the end of seven centuries that he is beginning faintly [to] divine that in Ireland, above all other lands, there are impalpable spiritualities which rise triumphant and imperishable before brutality. (100)

このようなアリスの辛らつな語り口は、後にこの日記を読んだヘンリーをも戸惑わせるものであった。もし、アリスがもっと現実の世界でイギリス人達との接触があれば、おそらくもっと異なる見方をしていたであろうとヘンリーは落胆ともとれる言葉を述べている。が、しかし、これがアリスの知る世界であり、彼女の真摯な見解であり、感情だったのだとすれば、それもまた、ひとつの真実であり、アリスが「読んだ」イギリス、彼女が「読んだ」世界のあり方であったのだといえるのではないだろうか。

そしてこの痛烈な社会批判は、自らの置かれた外界とも共振するものであった。富島美子が指摘したように、アリスの日記にはインテリアに「仮託」するモノ語りがあるのだとすれば、この箇所にもまた同質の仮託のモノ語りがあるといっても過言ではないだろう。イギリスの「暴力性」に長い年月打ち据えられ、疲弊してきたアイルランドの「精神性の高さ」を謳うアリスの記述はそのまま、暴力的に身体を病魔に侵されてもなお、高い精神性を維持しようと希求するアリスのありようと重なり共振するのである。アイルランド問題を語るアリスの雄弁さと、自身の病状への寡黙さは、反比例するというよりむしろ表裏一体の関係にあるのだと考えられる。

3. 隠喩としての病を「読む」

アリスを苦しめた病に、確たる名をつけられることはなかった。それは時に神経衰弱と呼ばれ、ヒステリー症状、リュウマチ、坐骨神経痛、通風などあらゆる名をつけられ、そして、医者の方に従って治療を施しても快方に向かわず、アリスはずっと自らの病に苦しみ続けていく。アリスの病状は、医者にも理解されず、また、周囲の人々からも理解されないまま、彼女の孤独と不安は言葉にならない声として心の中に閉じ込められていったと考えられるだろう。

アリスは、まだ、癌が宣告される1年前、すでに自らの弔い方について語り、淡々と「火葬にしてほしい」と言っている(88-89)。激しい発作を繰り返すなかで、自ら死を欲した時期もあったという逸話も残っている

(Edel 7)。30 歳の時、容態が悪くなり、激しいヒステリー症状と狂気、自殺願望に駆られる日々が続き、ベッドの脇に付き添っていた父親ヘンリーに「自殺することはいけないことか？」と尋ねたとき、彼は「アリスが死にたいのなら死になさい、ただし、友人たちを悲しませない方法で」“do it in a perfectly gentle way in order not to distress her friends” (7) と答えたと言われている。

自殺観については 19 世紀のヨーロッパにおいて変化が起こる。19 世紀以前、また、19 世紀においても、その実際の数値においては、男性の自殺者の方が多かったにもかかわらず、やがてそれは、「病理」と考えられるようになり、その過程で女性的なものと考えられるようになったという (Higonnet 70)。女性たちの自殺は、「自己破壊のみならず、愛という病への屈服としてとらえられるようになった」のである (71)。しかし、アリスはたとえ病が進み、やがて足が動かなくなり病床で過ごす時間が増えても、さらにはやがて、癌を宣告されて末期の痛みが激しくなろうと——同じ乳癌で安楽死という自殺を選んだギルマンとは異なり——最後まで、自ら命を絶つという手段を選ばなかった。それが宗教的な信心によるものでなかったことは、アリスが教会に通わず、最後まで懺悔を行わずに終りを迎えたことにも明らかである。

このような時代にあって自殺を選び取ることは、社会がイメージする「女性的」な行為を行うことであり、さらに父親がアリスに抱いていた「女性」的なイメージ、兄ウィリアムが哀れんだ脆弱な「女性」というアリス像に屈することになると、アリスは考えたのではないだろうか。アリス自身が「女性性」を拒んだわけではない。彼女は結婚を望み、母になることも望んでいた。アリスは、しかし、他者から付与されるアリス像が、男性中心的社会に押しつぶされる脆弱な存在になることを拒んだのだと言えるだろう。自らのありのままを受け入れ肯定することこそ、自分の人生を自分のものとして奪回し、生きようとするアリスの選択だったのだと考えられるからである。

1889 年、41 歳のときに癌を宣告された時、アリスは悲しみではなく寧

る喜びの声を上げている。それは、それまでアリスの病には正確な名がつけられず、確かな治療法も見つからないまま過ぐす区切りのない苦しみからの解放を意味し、それと共に、他者から「病人」として正式に認められる、つまり、アリス自身のみが十全に知っていた「病人アリス」と他者の理解が共振する「皮肉な」喜びでもあったのである。

癌はまた、アリス・ジェイムズが病むにふさわしい隠喩をまとった病でもあった。スーザン・ソントグは『隠喩としての病い』において、結核と癌が共に持っていた隠喩的効果について論じている。19世紀には、主に結核が、そして現代では癌が、ロマン派的な隠喩として文学などに多く用いられるようになったが、古くは14世紀頃から、これらの病は明確な正体がわからず医学的治療が効かない病気、正体不明の不治の病と考えられて神秘化されてきたことを指摘している。アリスは、自分の胸にできた癌を「私の胸の中にあるこの汚れた御影石のようなもの」と表現した。スーザン・ソントグは、そのようなアリスの言葉を引用して癌は退化そして縮小の隠喩であると論じている(13-14)。異質の細胞が体内に侵入し、その細胞が増殖し、身体の機能を衰弱・停止させてしまうものであると癌は定義づけられている。

癌の神話として何らかの感情の噴出が絶えず阻止されるのが原因であるとするソントグの論(22)に依拠すれば、アリスの身体を解体していくその癌は、アリスが絶えず感情を抑圧しようと努めた一生が生んだ異質の侵入者であり、その異質の侵入者はアリスの苦痛に満ちた一生を終焉させる解放の力にも繋がっていくのである。日記を綴ることがアリスにとって抑圧された「感情や感覚そして思索や内省の噴出口」であったとするならば、アリスが病んだ「癌」もまた、彼女の抑圧されたその人生を解放せしめるものになったと考えられよう。

そして、自ら手を下すのではなく癌という病によって命の終りを遂げることは、女性的である弱さや破壊的なナルシスムとして考えられていた自殺願望をも凌駕したことになる。父や兄たちがアリスに付与した「女性的な」イメージのみならず、社会が抱く女性的な行為としての自殺を避ける

ことで、アリスは、自らの「声」をその生き方そのものに残したのだ。

「読む」ことに長けていたアリス・ジェイムズは、こうして、日記を書き、そして自らの声に耳を傾けることで、自分がどのように生きたか、アリス・ジェイムズとは一体何か、そしてその身体を食んだ病「癌」とはどのような意味を持つものだったのかを「読み」込んだのだといえるだろう。「読む」アリスは、自らの人生を主体的に「読み」直し、自らの手で「アリス・ジェイムズ」を奪回したのである。そして、その書き残された日記からは、現在でも、アリス自身の「声」が発信され続けている。

Works Cited

- Boudreau, Kristin. "'A Barnum Monstrosity': Alice James and the Spectacle of Sympathy." *American Literature* 65. 1 (March 1993): 53-67.
- Edel, Leon. "Portrait of Alice James." 1964. *The Diary of Alice James*. Boston: Northeastern UP, 1999. 1-21.
- Higonnet, Margaret. "Speaking Silences: Women's Suicide." *The Female Body in Western Culture: Contemporary Perspectives*. Ed. Susan Rubin Suleiman. Cambridge, MA: Harvard UP, 1985. 68-83.
- James, William. "Hidden Self." *Scribner's Magazine*. Vol. 7. (1890): 361-73.
- James, Alice. *The Diary of Alice James*. Ed. Leon Edel. Boston: Northeastern UP, 1999.
- Sontag, Susan. *Illness as Metaphor and AIDS and Its Metaphors*. New York: Anchor, 1977. 『隠喩としての病い；エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、東京：みすず書房、1992年。
- Strouse, Jean. *Alice James: A Biography*. Boston: Houghton Mifflin, 1980.
- 富島美子『女がうつる——ヒステリー仕掛けの文学論』東京：勁草書房、1993年。
- Woolf, Virginia. "Hours in a Library." *Great English Essays: From Bacon to Chesterton*. Ed. Bob Blaisdell. Mineola: Dover, 2005. 196-201.

note

- 1 アリスの日記は 40 歳であった 1889 年 3 月から 43 歳で亡くなる直前の 1892 年の 3 月までの 3 年間に綴られたものである。
- 2 アリスは、最も親しかったキャサリン・ピーボディ・ローリングに、

自分の書いた日記をタイプングしてくれるように頼んでから死んでいった。ローリングは、それをアリスが日記の出版を望んでいたためだろうと理解してタイプングをして残した。アリスの死後 2 年程たってから、コピーをウィリアム・ジェイムズとヘンリー・ジェイムズに送ったが、両者とも出版に反対した為、そのまま保管されることとなった。最初出版されたのは 1934 年になってからである。

- 3 19 世紀、女性運動の盛んであったボストンにおいて、女性同士が住居を共にする生活形態が現れ始めた。兄ヘンリー・ジェイムズの中期の作品 *The Bostonians* (1886) にも描かれている。

- 4 ストラウスは、アリスの行った読書について以下のように述べている。
“Through books, Alice had access to a world morally freer and larger than her own. Unlike Grace Norton, she read straight throughout Montaigne without flinching. She saved Zola for Sundays, ‘to cheer up the Lord’s day.’ Her reading throughout the rest of the week in the late 1880s included that the letters of Charles Lamb and John Lothrop Motley, the Old Testament; Froude and Carlyle; the *Revue des Deux Mondes*, *La Nouvell Revue*, and the *Fortnightly Review*; everything Henry wrote; Pierre Loti (‘pagan, miasmatic, exquisite’); the novels and stories of Miss Woolson; *Don Quixote*; *David Copperfield*; Emile Montégut, Anatole France, Marie Bashkirtseff, Mrs. Humphry Ward, François Coppée; Fanny Kemble’s poems; *War and Peace* in French; Flaubert, Renan, de Maupassant” (Strouse 262).

- * 本論は、2007 年 1 月 27 日（土）慶應義塾大学三田校舎研究室棟に於て開かれた日本アメリカ文学会東京支部 1 月例会にて行った口頭発表「読書する女—— Alice James の日記における『読む』ことの意義」を大幅に加筆修正したものである。